前　言

一、趣旨説明

本シンポジウムは本学会が企画するプログラムであり、本学会会則第３条（事業）第４項に載る「会員の研究に対する援助」をその目的とするものです。主たる「援助」の対象は、本会のいわゆる若手会員でして、二〇二二年秋の第七十四回大会において始めて挙行されました。

すでに本会は、若手学会員の研究支援を目的として、二〇一一年三月に「第一回若手シンポジウム」を開催し、それを発展的に引き継ぐかたちで、毎年の大会において「次世代シンポジウム」を実施しています。本企画もまた、若手支援に関する年来の精神を分け持つものですが、それとともに、書評活動の活性化という目的を掲げ、若手を含む会員相互の学術交流の場の創成を目指しました。本企画を、「次世代シンポジウム」と別立てで実施する理由はこの点に存するのですが、そのより良い形態に関しては、引き続き、会員各位のご意見をうかがいながら模索してゆきたいと思っています。

本シンポジウムはパネルディスカッションの形式で行います。パネルは、複数の評者のほか書評の対象とする学術書の著者および司会者の各位によって構成されます。第七十五回大会では二組のパネルによる書評会を開催しました。次頁以降に、『大会要項』所掲の「要旨」を掲載しています。

パネルの条件に関しては、学会主催の活動として企画の公平性をいかに確保するか、そもそも書評シンポジウムをどのようにして若手支援に繋げるか、といった点を考慮して定めています。左記のものは、二〇二三年度のパネルに適用された条件です。

一、パネリストのうち、著者と司会者、および評者二名は本学会の会員資格を有していること。

二、書評の対象とする著作は、著者にとってデビュー作に相当する学術書で、二〇一九年～二〇二一年に刊行されたもの。評者の年齢は、原則として、当該学術書の著者と同年齢もしくはそれ以下。

三、専門領域・所属機関・性別などについて、多様性が考慮されたパネルを歓迎する。

なお、評者各位に対しては、あらかじめ、学会ホームページの『研究集録』に、大会報告にもとづく書評を掲載することを伝え、寄稿をお願いしています。その文章に関しては、原稿用紙二十枚程度を上限として、それより短くとも可、といった文字数の制限を設けました。

二、パネルの概要（附目次）

パネルⅠ・松下道信『宋金元道教内丹思想研究』（汲古書院、二〇一九年二月刊行、本文五〇〇頁）

本書は、中国近世期における道教の内丹思想を取り扱ったものである。第Ⅰ部では、宋から元における内丹思想、特にその中心となる性命説を全真教との関係の中で考察する。宋代以降、道教では内丹術が隆盛するが、北宋・金交替期の混乱の中、全真教に代表される、いわゆる「新道教」が登場する。この「新道教」という呼称は、日本では常盤大定『支那に於ける仏教と儒教道教』（一九三〇）、中国では陳垣『南宋初河北新道教考』（一九四一）に遡る。問題は、全真教を「新道教」とするこれらの言説の背後には、当時の日中双方の近代的視点が投影されていると考えられることである。

そこで第Ⅰ部では、こうした問題意識の下、全真教を、それが登場してきた内丹道との関係の中に置き直し、性命説を中心に検証した。これにより、「旧道教」とされた、全真教に先行する北宋の張伯端以下の内丹道でも既に頓悟が重視されていたこと、張伯端以下の内丹道と全真教の教説は機根や、上中下乗といった三乗の思想で整理でき、連続性を有していることを明らかにした。また、その後の元・陳致虛らの教説が命術の重要性を強調している背景には、禅宗や朱子学とはまた異なる宗教的なあり方への志向があるであろうことを指摘した。

第Ⅱ部では、日本の神道、特に吉田神道と内丹思想の関係について、『修真九転丹道図』の内丹思想とその伝承について考察した。

パネリスト

評者：藤井倫明（九州大学。宋明理学。特に朱子学・陽明学の心性論、修養論、聖人観についての研究）

奥野新太郎（岡山理科大学。元代文学、宋元交替期の詩文）

村田みお（近畿大学。仏教思想、芸術論を中心とした六朝隋唐思想史）

劉青（弘前大学。道教思想、近世養生思想及び東アジアにおける展開）

著者：松下道信（皇學館大学）

司会：齋藤智寛（東北大学）

【目次】

はじめに
凡例
Ⅰ　宋・金・元代の内丹道および全真教における性命説
序章　「新道教」再考
——全真教研究の枠組みについての再検討——
第一篇　宋代の内丹道における性命説とその諸相
第一章　全真教南宗における性命説の展開
第二章　白玉蟾とその出版活動
——全真教南宗における師授意識の克服——
第二篇　金代の全真教における性命説とその諸相
第一章　牧牛図頌の全真教と道学への影響
第二章　全真教の性命説に見える機根の問題について
——南宗との比較を中心に——

前　言
第三章　全真教における志・宿根・聖賢の提挈
——内丹道における身体という場をめぐって——
第三篇　元代の全真教における性命説とその諸相
第一章　『還丹秘訣養赤子神方』と『抱一函三秘訣』について
——内丹諸流派と全真教の融合の一様相——
第二章　趙友欽・陳致虛の性命説について
——いわゆる「全真教の堕落」をめぐって——
補論一　内丹とカニバリズム——食人・嬰児・房中術——
補論二　日本における全真教南宗研究の動向について
附：全真教南宗研究文献目録略
Ⅱ　神道と内丹思想
——吉田神道における内丹説の受容について——
第一章　『陳先生内丹訣』の内丹説とその伝授について
第二章　吉田神道における道教の影響について
——『北斗経』と内丹説の関係を中心に——
資料　天理大学附属天理図書館吉田文庫所蔵『太上老君説常清静経』・解題・翻刻・図版
全真教師承系譜図略
宋・金・元における全真教および関連人物生卒表
書誌
あとがき
索引
Abstact（英文サマリー）

パネルⅡ　宋　晗著『平安朝文人論』（東京大学出版会、二〇二一年四月刊行、三六二頁）

本書は、平安朝文人の伝記的事実に基づく人物像や、彼らの社会的属性・思想的特性の究明ではなく、漢詩文の視角から平安朝文人の精神史を素描したものである。

律令制を導入した古代日本では、漢文による文書行政を運営するため、公共的な文章（詔勅から公宴で享受される詩賦まで）の作成に精通した官人が養成された。本書では特に、大学寮文章科で漢文の読み書きを専門的に学習した者を文人と定義し、彼らがいかに公共的な文章の世界を媒介として自己表現を開拓していったのか、公私に渉る平安朝漢文学という表現世界の形成過程を照射した。具体的には、九世紀初頭からほぼ三世紀を視野に入れ、菅原道真をはじめとする文人の漢文作品を通時的に分析した。考察の要点は大略以下の三点である。

一、公共の場で通用する漢文学の表現が私的な述作に応用されることで、個々の文人ならではの表現が派生していったこと。

二、中唐古文の新動向を承ける白居易の散文が、『白氏文集』が広く受容されるようになった九世紀後半以降の平安朝において、個人的な漢文の散文のモデルとなったこと。特に、中唐に勃興した散文ジャンルである「記」が重視されていたこと。

三、六朝・唐文学をモデルとした平安朝漢文学が、十世紀を境目にして、平安朝文人の詩文に平安朝文人が影響を受けるというような、自律的な表現史の展開が顕在化していったこと。

パネリスト

評者：金鑫（東京大学人文社会系研究科・日本学術振興会外国人特別研究員。中国六朝・唐代の詩と文）

高山大毅：（東京大学。徂徠学を中心とする近世日本思想史・漢文学）

藤田衛：（広島大学文学部非常勤講師。漢代易学）

著者：宋晗（フェリス女学院大学）

司会：大村和人（徳島大学）

【目次】

序　平安朝漢文学と文人

第一部　文人意識の端緒

第一章　嵯峨朝における文章と経国――漢文芸の二重の価値

第二章　嵯峨朝詩壇と個人の文学

第三章　菅原清公の「嘯賦」――趣味の意義

第四章　平安朝漢詩の変貌

第二部　九・十世紀交替期の文人と散文の個人化

第一章　都良香の散文における新動向

第二章　菅原道真の憂悶――閑居文学の変奏

第三章　紀長谷雄の自伝

第四章　平安朝散文史における九・十世紀漢文の意義
第五章　和漢の散文の交渉
第三部　平安朝中後期漢文学における定型性と固有性
第一章　兼明親王の文学――孤高と閑適
第二章　慶滋保胤「池亭記」のスタイル――思考の理路
付　論　慶滋保胤の詩序における「池上篇」受容
第三章　大江匡衡と八月十五夜――都と辺土
付　論　平安朝における駢文と散文の連関
第四章　大江匡房の文業
終　章　平安朝文人の文学